

研修報告書

広島県立広島高等学校
多田 加奈子

1. はじめに

私は平成 25 年 7 月 23 日から 8 月 12 日までハワイ大学カピオラニ・コミュニティー・カレッジ (KCC) における広島県英語担当教員語学研修に参加した。この研修に参加するにあたって目標が 3 つあった。

- (1) 英語の授業を英語でスムーズに行うことができるよう、自分自身の英語力向上を図ること。
- (2) 生徒の英語コミュニケーション能力の育成のため、**Content-Based Instruction** について学び、授業に取り入れる方法を見つけること。
- (3) 来年の修学旅行でハワイを訪問する前に、ハワイの文化について学び、生徒に伝えること。

日本を出発する前、私はこの研修で成果を出すことができるかどうか不安を抱いていた。出発前に研修に向けての準備をする時間を十分とることができなかったため、そして前年の参加者からとても忙しく、真夜中まで課題をしなければならず、睡眠不足になっていたと聞いたからだ。しかしながら、同時に期待で胸を膨らませてもいた。この報告書を書くにあたり、KCC で学んだことを振り返ってみたい。

2. 英語教授法研修

まず始めに、私たちは第二言語習得に関する最新の用語リストを確認した。私はリストの約 3 分の 1 の用語について意味を言うことができなかったが、マーム教授によると、この研修の最後には全ての用語の説明ができるようになってはいるはずであるということだった。教授はそれらの用語を直接説明するかわりに、**Content-Based Instruction** を実際に体験しながら私たち自身が学んでいくという手法で教えてくださった。

この授業では、**Sustained-Content Language Learning(SCLL)** と **Content-Based Instruction(CBI)** について学んだ。まず第二言語習得における理論と教授法の歴史についてのプレゼンテーションを聞いた。大学でも勉強していたため、**コミュニカティブ・アプローチ** までの主な教授法はすでに知っていたが、**Task-Based** や **Problem-Based**, **Content-Based Integrated Skills Approach** などの比較的新しい教授法については、本で読んだことはあったがきちんと学んだことはなかった。このような新しい教授法のほとんどでは、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングなどの言語技能が効果的に統合されている。また、CBI では、学習者は英語を使ってある内容について話し合ったり学んだりする。言い換えれば、学習者はある内容について学びながら言語を学んでいることになる。この手法を用いれば、学習者は真の目的をもって英語を使用し、内容について学び、考えることで批判的思考能力も高めることができると考えられる。私はこの教授法にとっても興味をもち、有益であると感じた。

プレゼンテーションの後、CBI を授業に取り入れる方法についてブレインストーミングを行った。まず、どのような内容を選ぶべきかを決めるため、生徒の興味関心について話し合った。それから、それぞれの言語技能と文法能力、論理的思考能力を高めるために考えられる活動をいくつか挙げていった。最後に、予測しうる生徒の反応についても考えを述べた。私はこのセッションから、活動がより意味をもったものであればあるほど、生徒はより積極的に学習に取り組むようになるだろうことを学んだ。また、効果的な CBI のためには、教師が活動内容をよく練り、内容の学習と言語習得のバランスをうまくとる必要があることも学んだ。

私たちはまた、インタラクションとは何かについても話し合った。マーム教授から、インタラクションとは二つ以上のものが互いに影響を及ぼす過程であると教わった。私たちはインタラクションの例をいくつか挙げ、様々な活動をよりインタラクティブにする方法を考えた。そして文法指導や発音指導をする際にも、活動をよりインタラクティブなものにすることができるといことがわかった。

3. 上級言語発達セミナー

(1) Reading

私たちは毎日第二言語習得についての記事や論文をたくさん読んだ。すべての単語や文を理解する必要はなく、内容やメインテーマが理解できれば良いと教授からアドバイスされた。また、知らない語句に印をつけ、大事だと思ふ文にはマーカーで線を引くなど、辞書を使わずに効果的に素早く英文を読むコツも教わった。英文を読んだ後には読んだ内容について意見を交換することになっており、読んだ内容について自分自身の考えを整理しながら読み進むことができた。もし学習者が目的をもっていれば、より関心をもって読む活動に取り組むことができる。ここでは、リーディングの際は学習者に読む目的を与えることが重要であると学んだ。

(2) Writing

研修の最初の週は毎日ジャーナルを英語で書いた。その日に学んだことのまとめや英語教育における問題について自由に書いていった。次の日には書いた内容や感じたことについて簡単に発表する機会があった。フリーライティングでは、文法的な間違いは気にせずにできるだけたくさん書き続けることが大事で、「正確さ」よりもむしろ「流暢さ」に焦点が置かれている。以前の私は生徒の文法間違いにばかり気を取られてしまっていたが、このセミナーを通して、まず「流暢さ」を高めることが重要であり、「正確さ」は後から高めていくことができることを学んだ。その後、教授は「正確さ」を高める手法を示してくださった。始めに、トピックと使うべき語彙を提示し、フリーライティングを行った。それから、教授は正しい英文に線を引き、私たちは線が引かれていない英文の中の間違いについて、自分で考えたり、ペアやグループで話し合ったりして間違いを直していった。そして最後に元の原稿を見ずにもう一度書き直していった。この手法では、学習者は自分たちで間違いに気付くことができるとともに、ペアやグループで話し合うことでディスカッションやインタラクションを行うこともできる。また、間違えた英文を書き直す機会も得られる。

また、マーム教授は教育哲学や研究論文を書く際に、プロセスライティングを行う方法についても示してくださった。このような手法は生徒の書く力を高めるのに非常に効果的であると感じた。また、日本人の学生が1段落以上の英語を書く機会がほとんどないのではないかということについても指摘を受けた。私はこの指摘に全く同感であり、生徒はもっと長い英文を書く機会を与えられるべきであると感じた。

(3) Speaking and Listening

研修中にポスターセッションを見学する機会があった。英語力は標準程度の日本人留学生によるもので、トピックは「アメリカの市民権」についてであった。様々な映画を見たり記事を読んだりして市民権や差別について英語で学び、パワーポイントでプレゼンテーションを作成し、クラスの前で発表するという活動であった。目的は生徒の話すことにおける「流暢さ」を高めることであり、いくらか間違った英語を話してはいたが、学生たちは学んだことについて一定量の英語を話すことができ、確実に自信がついていくようすが見られた。また、この種の活動では、内容について学んだ後の学習者自身の考え方の変容も期待できる。

英語でコミュニケーションをとる際には質問をする力が大事であると学んだ。海外へ行った際、最もよく使う言語機能は質問することである。また、人が言ったことがわからなかったとき、きちんと理解するためにも質問をするべきである。これが本当のコミュニケーションではないだろうか。そのため、英語で適切に質問をする力も身に付けさせる必要がある。私の生徒にももっと英語で質問をする機会を与えるべきであると感じた。

次に教授はリスニング活動について具体的な例を示してくださった。You Tube のビデオを見て英語を聞き取り、どれだけ内容が理解できたかパーセンテージで示した。その後語彙や文法事項を学び、もう一度聞き、さらに理解度を確認した。この方法であれば、学習者は実際に理解度が上がっていることを実感できると感じた。興味深かったポイントは発音指導であった。一つの語を音節に分け、同じ音をもつ別の語を使ってそれぞれの音を示していた。これはとても効果的で理解しやすいと感じた。

4. 教育問題セミナー

ハワイの教育委員会を訪れ、ハワイの公教育システムについて学ぶ機会をもたせていただいた。教育委員会を訪れる前に、マーム教授が新しい教員評価システムについての新聞記事を見せてくださった。それによるとハワイの教育成果はアメリカの中でも非常に低く、今後良い教育成果を生み出すためにも、Educator Effectiveness System(EES)という新しい教員評価システムを来年度から正式に取り入れるというものであった。これは教員を評価するためだけのものではなくフィードバックを与えて、教員の資質向上を手助けしようとするものであると教育委員会で説明があった。評価は管理職による授業観察、生徒のアンケート、生徒の成長率、生徒の学習目標などによって総合的に判断される。興味深いと感じたのは、生徒のテストの点数によって評価するのではなく、生徒のテストの点数の伸び率によって評価をするという点であった。

KCCの副学長であるPagotto教授によるハワイの言語と教育の歴史についての講義も受けることができた。教授はどのようにハワイで学校教育が始まったか、人々が英語能力によってどのように分離されていったか、そしてハワイのピジン英語がどのように作り出されていったかなど非常に興味深い講義をしてくださった。今でもピジン英語が話されており、ピジン英語で書かれた良い本もいくつか出版されている。私たちはピジン英語で書かれた話を読んだが、驚いたことにいくつかの語句や文法が理解できなくても話の内容を理解することができた。私はこれがまさに教授たちが私たちに伝えようとしていた読むことの「流暢さ」というものではないかと感じた。たとえいくつかの語彙や文法が馴染みのないものであっても重要なポイントは理解できるのである。また、ピジン英語が日本人学生の文法間違いとよく似ている点も興味深かった。

また、プランテーション時代からの古い学校区分制度のため、ハワイの人々が初めて会った人に対してどの高校を卒業したかを尋ねるといふ事実には驚いた。私には非常に奇妙に思えたが、ハワイは小さな島の州であり、コミュニティも非常に小さなものになっているからだと言われた。彼らは今でもどの高校へ行ったかで人を判断する傾向があるという。

5. 課外授業

ハワイの歴史や文化を学ぶため、プランテーション・ビレッジとUSS ミズーリ・メモリアルを訪れた。プランテーション・ビレッジは一種の屋外型博物館で、プランテーション時代からの修復された建物やレプリカなどがある。まず、ハワイ、中国、ポルトガル、プエルトリコ、日本、沖縄、韓国そしてフィリピンの旗が目に入った。これらの旗は移民たちの出身国の旗であった。また、神社や銭湯など移民たちが自分たちの文化を守ろうとしていた様子が見え、それが多くあった。ガイドはこの村に以前住んだ経験をもつ方で、当時の生活

やいかにさまざまな民族が協力し合っていたかについて話してくださった。ハワイの移民の歴史や多民族社会の背景についてさらに興味をもつことができた。

USS ミズーリ戦艦では、パールハーバーという場所が、第二次世界大戦が始まるきっかけとなった場所であると同時に、戦艦ミズーリが大日本帝国の代表が戦争を終結するための降伏宣言に署名をした場所であるという事実に感銘を受けた。偶然にもパールハーバーを訪れた日が日本時間の8月6日であったこともあり、平和の重要性について考える良い機会となった。

6. 教育哲学

初めにマーム教授が KCC での仕事に応募する際に提出した教育哲学を読んだ。それは彼女の教育に対する信念を非常にわかりやすく伝えるものであった。それから教育についての諸問題についてブレインストーミングを行い、フリーライティングをし、書いたものについてディスカッションを行った。私は「私はなぜ教えるのか」「教師と生徒の関係はどのようなものであるべきか」「生徒に対する最終目標は何か」について書くことに決めた。書く際に、教育哲学についての記事も読み、自分の哲学を書くことの重要性を理解した。正直に言うと、この研修の中では教育哲学を書くことが私にとって一番大変になるだろうと感じていた。そのとき、転勤したばかりで自分の授業スタイルに自信がもてず、私の教育に対しての思いや感情はもつれた糸のように絡まっていたのである。しかしながら、教育哲学を書くにあたって、英語を教えることについて考えがまとまり、前向きな感情を取り戻すことができた。おかげで今、自分の目標をはっきりさせることができた。私は生徒に幸せになってほしい、夢をかなえてほしい、そして英語を楽しんで学んでほしいから教えている。もし生徒が英語を学ぶことを楽しめれば、自分自身で学ぼうとする態度も育ち、将来英語でコミュニケーションをとるような場面でも成功することができる。私の最終目標は、生徒が国際社会に貢献できる良い市民となれるよう手助けをすることである。この目標を達成するために、英語教師として彼らの英語力を向上させるだけでなく、論理的思考能力を身につけさせ、彼らの考え方を柔軟させる手助けもしていきたい。

7. 模擬授業案

教育哲学を書いた後、模擬授業案作成に取り組んだ。KCC で学んだことを利用したいと考え、生徒ができるだけ多く英語を使う機会を増やすために4技能の統合を取り入れた授業案を作ることにした。レッスンの中の二つの写真を使い、生徒がお互いにインタラクションをとる必要があるようなインフォメーション・ギャップ活動を考えた。まず始めにスキーマの活性化として、生徒がそれぞれ別々の写真について何についての写真かを推測し、英語で自由に描写する。このことによって生徒がその写真についてもっと知りたいと思い、英語を読む目的をもつのではないかと考えた。また、生徒が意見を書いたり、話し合ったり、発表したりする機会を与えるよう工夫した。マーム教授から、発展学習としてインターネットの *authentic material* を利用してポスターセッションを行うこともできると助言を受けた。そうすることで生徒は内容についてさらに情報を得ることができるとともに、実世界で使う言葉として英語を学ぶことができる。このような活動に慣れていない生徒にとっては少し難しい内容かもしれないが、本当のコミュニケーションのために英語を使わなければ、実際の世界で英語を使ってコミュニケーションを図ることはできないことを理解させ、チャレンジさせたい。

8. 研究論文

私の研究テーマは、「Effective Integration of Language Skills Based on a Content Theme

in Japanese High School EFL Classrooms」であった。KCC で学んだことを生かしたいと思い、授業中に用いる実践的活動に焦点を当てた。さらに、私は **integrated-skills instruction** が学習者の流暢さだけでなく正確さにも焦点を当てているという点に非常に興味をもった。この教授法では 4 技能が統合されているため、より自然な言語習得の方法であると言える。生徒たちはまた、多くのインプットやアウトプットの機会が得られる。しかしながら、日本の英語教育では、決まった教科書を使わなければならない。教師は **Content-based instruction** と教科書の内容を結び付けることで、日本の状況に合った新しいスタイルの **integrated-skills instruction** を作り出す必要がある。今私にとって最も大きな課題は、KCC で学んだことを日本の高校の授業に取り入れるための最適な方法を見出すことである。そのためにもより柔軟な考え方をもち、教科書本文の内容を補足できる **authentic** な教材を探し、利用する必要がある。

研究論文では、まず日本の英語教育の背景を述べ、**integrated-skills instruction** に興味を持った理由を挙げた。その後、授業で使えるような活動をいくつか紹介した。最後に、適切な **scaffoldings** や起こりうる問題について書いた。内容についてはマーム教授と何度も話し合い、書き直しを行った。

研究論文を書き終えた後、発表用のパワーポイントを作成した。マーム教授からパワーポイントには重要なキーワードのみ使うようにとアドバイスしていただいた。発表練習の際には多くの肯定的なフィードバックや有益な助言をしていただいた。発表の日には教育委員会からのお二人や KCC の教授や学生を含む約 10 名の方々が私たちの発表を聞きに来てくださった。非常に緊張していたが、前日に練習をしていたため、そのときよりは良い発表ができていたと思っている。聞いてくださった方々が非常に協力的であったことも助けとなった。彼らは時折うなずいたり、メモを取ったりして興味をもって発表を聞いてくださり、安心して自信をもって発表することができた。私はこの経験から、生徒もクラスの前で発表をしなければならないときは同じような緊張感を感じていると改めて実感することができた。彼らの緊張が理解できた今、生徒がより自信をもって発表できるように私もより多くの肯定的なフィードバックを与えていきたいと思う。

9. おわりに

ハワイを訪れるのは初めてであったため、ハワイでの生活がどのようなものになるか想像がつかなかった。万事順調とは言えなかったが、概して素晴らしい時間が過ごせ、ハワイを訪れる前に設定した自分の目標はほぼ達成できたと思う。この研修を通して、CBI について学びながらたくさん英語を聞き、読み、書き、話すことで英語を上達させていった。また学生になるということは非常に興味深かった。毎日深夜まで学習をしなくてはならなかったため大変ではあったが、新しい何かを学ぶことの喜びも大きかった。そして、教師は学習者、そして革新者でもあるべきであると感じた。自らの教授法を変えるのは容易ではないが、効果的な方法について学び、一つ一つ新しい活動を試すことから始めることはできる。教師は生徒の英語力を高めるより良い方法を身に付けるために懸命に努力しなくてはならない。今後私も KCC で学んだことを生徒に還元するべく努力を重ねていきたいと思う。

最後に、広島県教育委員会、KCC の教授やコーディネーターの方々、一緒に研修を受けた二人の先生方、そして私たちがこの研修を達成するために努力していただいた多くの人々に心から感謝の意を表したい。